

## 日本人移民の「ユートピア」 ——アメリカ救世軍日本人部の社会事業館——

坂口満宏

### 1. はじめに

日本人移民の「衣・食・住」として、「住」が語られる場合、日本人移民によって建てられた寺院や教会、旅館や劇場などの事例に注目が集まることが多いが、ここでは養老院や小児園、少年少女ホームや婦人ホームなど社会救済施設として建てられたものも移民の生活にとって不可欠な場であったことから、これらを一つの「住」とみなし、考察の対象にしていきたいと思う<sup>1)</sup>。

1920年代後半になると、1900年前後に渡米してきた日本人移民一世たちも50歳前後となり、この当時の通念によれば「初老」を過ぎる年齢となっていた。他方、1910年代後半から1920年にかけての時期は、移民の妻としてアメリカに渡ってきた日本人女性が増えたことから、移民夫婦の間につきつぎ子どもが生まれ、日本人移民社会は一大出産ブームとなっていた。こうして1920年代後半のアメリカにおける日本人移民社会は、年老いていく移民一世の養老問題とアメリカで生まれた幼い二世たちの保育・教育問題という双子の課題に、同時に直面することとなったのである<sup>2)</sup>。

老人であっても身の回りの世話をしてくれる親族が身近にあれば、安心した老後を過ごすことができたかもしれない。だが身寄りのない独居老人であれば、何らかの支援が必要となる<sup>3)</sup>。また不慮の事故や病気によって父母を失った子どもたち、また親がいても貧困や育児放棄によって満足に食事をとることのできない子どもたちが増えてきた。こうした子どもたちを保護するため、シアトルやロサンゼルスにはいくつか小児園が設立され、活動していたが、サンフランシスコにおいてその役目を担っていた施設が、アメリカ救世軍日本人部によって設立された社会事業館であった<sup>4)</sup>。

アメリカ救世軍日本人部（以下、救世軍日本人部と略す）が設立した社会事業館とは、親を失った子どもたちのみならず、夫の暴力から逃れてきた女性たちや身寄りのない老人たち、病气療養中の入院患者をも収容したもので、文字通り、日本人移民社会にとっては欠かすことの出来ない一大社会事業施設であった。アメリカにおける救世軍日本人部の設立過程とその社会事業活動の全般については、すでに別稿にて論じていることから、ここでは「移民の住まい」とみなすべき社会事業館の取り組みの実際とその歴史的変遷について、サンフランシスコで発行されていた『日米新聞』と『新世界朝日新聞』の記事を数多く示しながら明らかにしようと思う<sup>5)</sup>。

## 2. 1921年の社会事業館——その設立と拡充

### 2.1 休養所（療養所）と社会事業館の設立

アメリカにおける日本人救世軍の活動は、1919年8月16日、小林政助大尉・徳子夫妻、日本からやってきた山田万治郎曹長、喜久田虎雄大尉、シカゴからやってきた尾崎宗一、赤木八蔵両中尉、ロサンゼルスからやってきた永島与八中尉の7人がサンフランシスコに集まり、サンフランシスコ小隊と休養所を開設したことから始まった。救世軍が言うところの「開戦」である。そして9月13日には永島与八がロサンゼルスに、10月22日には喜久田虎雄がフレズノに、12月13日には尾崎宗一がストックトンに小隊を開設し、その活動範囲を広げていった。

救世軍の組織は、拠点地域の本営によって統括された各地の小隊（支部）が日常的に「伝道」と「社会事業」に従事することを基本としており、この体制は世界各地の救世軍に共通するものであった。地方小隊での取り組みについては別稿に詳述してあるので、ここではまずサンフランシスコ小隊によって設置された休養所（療養所）とその後に設立された社会事業館での活動に焦点を当てることとし、詳しく述べることにしたい。

1919年8月16日、サンフランシスコに「開戦」した日本人救世軍は、サンフランシスコ小隊の開設と同時にヘムロック街（Hemlock St.）525番地に休養所（療養所）を設置した。『日米新聞』の取材に応じた大尉の小林政助は、休養所を設置した目的と役割について次のように語っていた。

未だホンの試みに過ぎませんから到底完全した設備は困難ですが、休養所として借り入れた家では5室を有し、収容人数は先づ10人迄の予定。休養所に収容する人々は重に病院を出たの病人で、二三週間休養したいにも費用がなしと云ふ人々や何かの事情で忽ち今日の生計に苦しむ人々とか或ひは場合に依つては病気で入院と迄行かず自宅療養する人々等で、費用の不足な人々のお世話をする筈ですが、本部でも日本人の為め救済設備等が必要な際は何処迄も後援するといつて呉れますので、非常に心強い訳です<sup>6)</sup>。

休養所（療養所）は「遠く故国を離れ、異境にて奮闘の余、病魔の襲ふ処となりて寂しき生涯を送る者の為、又は特別の事情にて助を要する病者等の為」<sup>7)</sup>に設けられたもので、古庄弘が主任として、老人と病人の世話にあたっていた。そしてこの間にロサンゼルス、フレズノ、ストックトンに地方小隊が開設されていたことから、サンフランシスコの休養所はより専門的、より長期的療養を必要とする患者の救済機関として位置付けられていった。

『ときのこゑ』によれば、休養所には絶えず10名前後の入院患者が収容されており、その延べ人員は開設後の1年間だけで2,600名に達したという。また徹底的に療養したいと願う日本人のために医療部が設けられており、ここでは専門医師による診察と往診、X線や血液検査が受けられた。過去1年間に338名の患者を取り扱ったと記録されている<sup>8)</sup>。

「開戦」から2年が過ぎた1921年、日本人救世軍がアメリカ救世軍西部軍国に編入されると、アメリカ救世軍日本人部と名付けられた。そして西部軍国の司令官ギッフォード少将は、救世軍日本人部が求めている社会事業館の必要を認め、サンフランシスコ市内でも日本人の集住す

るゲリー街 (Geary Blvd.) とラグナ街 (Laguna St.) の角地にあたる土地と建物の購入を許可した。これを機に救世軍日本人部では本格的な社会事業館の設置に向けて動き始めることとなった。

ここで注目すべきことは、サンフランシスコ総領事の矢田七太郎を筆頭に、当時の日本人社会の名士たち 17 名が名を連ね、社会事業館の設立に要する費用の拠金を呼びかけたことである。以下はその呼びかけ文の全文と呼びかけ人の氏名である。ただし、( ) 内の職業や役職については坂口が付記したものである。

#### 無料診療所設立に付て賛助を仰ぐ状

今や我在留民間に於て着手すべき事業渺ならずと雖も、其最も緊急にして一日も忽諸に附す可らざる者は疾病者の救護なりとす。然るに同胞間に於て未だ一の公設病院もなく簡便にして良医師の診察治療を得んと欲するものや或は費用支弁の途なく病床に呻吟して苦悶の中に空しく死を待つもの憫むべき状態に在る者、此等に対して誰か測然として一掬の涙無きを得んや、若し之を傍観して顧みざらんか、其病毒や他に伝播し益々患者の多きを加へんとす、夫れ同舟の人期せずして相救ふは人情の美なり、我等相俱に万里の異郷に在て学業に職務に各々従事する所の者たり、一朝不幸病の為め異郷無縁の鬼と化せしむるに忍びんや。

救世軍の此地に設置されし以来、療養所を置いて軽美〔微〕なる患者を収容加療し来りしも、未だ特定の医師もなく又家屋も狭隘にして多数人を容るにたらざりしが、今回新たに家屋を購入して社会部を設置し、前記療養所を拡張すると俱に、無料診療所を開設して日米人の良医師を特聘し以て遍く同胞患者の診察治療に任せんとすと聴く、是れ寔に時宜に適したる計画にして吾人の要求に合致する所の事業たり、仍て同胞諸君は此の必要にして尊貴なる社会奉仕の志業援助完成せしめん事を期せざる可らず、別冊設立趣意書を添付し広く大方慈善家に訴へんと欲するところである。

1921年9月

矢田七太郎	(サンフランシスコ総領事)	矢田鈴江	(同上妻、加州日本人慈恵会会長)
手島知健	(三井物産桑港支店長)	手島久子	(同妻)
国府精一	(住友銀行桑港支店支配人)	土井慶吉	(東洋汽船桑港支店長)
小島久太	(横浜正金銀行桑港支店長)	小島好子	(同妻、慈恵会員)
安孫子余奈子	(安孫子久太郎の妻)	内田晃融	(本派本願寺北米開教総長)
内田せと子	(同上妻)	青木道嗣	(大成堂 書籍文具店主)
大橋邦三郎	(大橋輸入商会)	松前 励	(東洋汽船桑港支店勤務)
萩原 真	(大和屋 日本料理店主)	E・A・ストウジ	(長老派教会牧師)
副島八郎	(北辰新報社社主) <sup>9)</sup>		

呼びかけ人の多くは、日本から派遣された商社マンとその妻たち、それに在米日本人会の評議員や加州日本人慈恵会の役員などで、1920年代のサンフランシスコにあって日本人移民社会に政治的・経済的・宗教的に大きな影響力をおよぼすことのできる人々であった。このうち北

辰新報社社長の副島八郎は友人と謀り、「〔副島〕翁の還暦祝賀の為に翁を徳とする人士より献金を集め」とし、集めたお金1,153ドル45セントのすべてを「養老院に寄附する」としていた。また加州日本人慈恵会は社会事業に補助するため1,500ドル交付するとし、サンフランシスコに出張してきた救世軍万国本営のブラムエル・ブース大將からは5,000ドルの下賜金があった。こうした大口の寄付金と多数の在留日本人からの拠金により、社会事業館の土地と建物の購入に要した3万ドルはまかなわれた<sup>10)</sup>。

## 2.2 日本語新聞にみる社会事業館

では1921年11月6日に献堂された社会事業館は、どのような設えだったのだろうか。

建物は木造二階建てで、ここに救世軍日本人部の本部と75名を収容する大小51の部屋があり、さらに無料診療所、人事相談部、療養所（病院退院後の静養所）、養老院を備え、隣接して婦人ホーム、育児院、第二世指導寄宿舎それに専任教師一名が担当する幼稚園を併設していたという<sup>11)</sup>。1926年アメリカに立ち寄った山室軍平の手記には、社会事業館の様子が詳細に綴られている。この手記の記事はすでに別稿で紹介したものであるが、社会事業館の概要を知るうえで最も有用なものであることから、再び示しておきたい。

- 一、桑港ノ日本人部ニハ医療部アリ。ドクトルブラオンガ来テ凡テノ病氣ニ手当ヲスル。一寸シタ手術モシテクレル。毎月、260件位扱フ。面倒ナノハ病院ニヤル。
- 一、編集部アリ、3ケノ集会堂アリ。病人ノ為、小児ノ為、女達ノ為。
- 一、「オフィス」アリ。
- 一、幼稚園、15,6人居ル。「ハワイ」生レノ一少女之ヲ受持ツ。
- 一、寄宿生ノ為ニ、12室ヲ用フ。
- 一、療養所ノ為ニ、25室ヲ用フ。
- 一、小隊会館アリ。
- 一、別ニ「エデュケーショナル」「レクリエーション」等ノ為ニ用フル室アリ。第二世ノ為ニ若干ノ尽力ヲナシツ、アリ。
- 一、室ハ計51アリト云フ<sup>12)</sup>。

父や母を病気で失い路頭に迷っていた子どもたち、日本の本籍地に照会しても扶養義務者のいない年老いた一世たち——こうした人々が救世軍の社会事業館に助けを求めていた。1920年代後半になると日本人移民一世の高齢化が進み、社会事業館に収容されるものも増え、社会事業館も相次いで増築されていくこととなった。

そこでここからは、サンフランシスコで発行されていた日本語新聞の報道記事を通して、社会事業館の実情を紹介していくことにしよう。まずは1928年6月8日、救世軍の小林政助が井田守三サンフランシスコ総領事ならびに在米日本人会の幹部を社会事業館に招き、館内を案内するとともに資金援助を求めていた際の事例である。この時点で社会事業館が5棟に拡充していたことが分かる。

救世軍の社会館は目下5棟の建築で養老院、育児院、婦人ホーム、療養所、少年少女寄宿舎等の事業に従事してゐるが、現在収容者75名、内45の少年少女に乳飲み児、他は老人と婦人と病人といふ一杯の有様で既に収容力を超過し、もはや他の申し込みに応ずることの出来ない程度に差迫つたのである<sup>13)</sup>。

翌1929年は、日本人の救世軍がサンフランシスコで「開戦」してから10年目にあたる節目の年であった。『日米新聞』は救世軍日本人部の「社会事業十ヶ年の成績」を掲載するとともに、1929年までに社会事業館の建物が6棟に拡充していたことを報じていた。

桑港の社会事業館は、社会の要求に迫られ、漸次その内容を拡張し、今回さらに一軒の大家屋を借家し、それに養老院を移し、少女ホームをその跡に移転し、合計百余名を収容する大社会事業館となした。救世軍では一般同胞が社会事業館の設備を參觀せんことを希望してゐる<sup>14)</sup>。

外務省の記録によれば、第1号棟の階上を男児ホームとし、階下を事務室、日本語教室および公会堂としていた。第2号棟では階上を男児ホーム、階下に社交室、治療室を置き、第3号棟では階下を食堂そして階上を職員室としていた。第4号棟には日本語教室と女児ホームを当て、第5号棟の階上に小児院と婦人ホーム、階下に運動室を置いていた。第6号棟を養老院としていた。職員数は12名(内アメリカ人救世軍士官1名)であったという<sup>15)</sup>。

では、どのような子どもたちが社会事業館に収容されていたのだろうか、そして社会事業館ではどのように生活していたのだろうか。ここではそのことがよく分かる記事を3つあげておきたい。まずは「14を頭に6人の子供路頭に迷ふ 母親が病死したので救世軍の手で収容」という『日米新聞』1930年6月27日に記事である。

王府に農場を経営する小山次郎(特に本名を秘す)なる邦人は、7週間前〇〇子(仮名)をば肺病のため亜郡病院に失つて以来6名の子を養ってきたが、何分貧困なる上に、14を頭に生後7ヶ月の幼児にいたる6人の幼児を男手一つで育てあげるすべもなく、ホトホト困りぬききつてゐる際、救世軍の手によつて、全部子供達を桑港救世軍ホームに収容させることになつた。子供は14,12,8,6,4,7か月の6人、女児4人、男子2人でいづれも頭髪にはシラミが、一杯くひつき、昨日係員一同クリクリ坊主に刈あげてしまつたほどである。

右につき係り員某氏は語る。「小山氏については、王府裁判所から香ばしからぬ噂を聞いてゐる。氏の宅を訪れた王府の衛生官は。その余りに不衛生で、子供達に対する不衛生な取りあつかひの廉で召喚し訪問したところ、氏は一日ブレッド一本あれば、立派に子供をそだてあげる。余計なお世話だといつたそうである。なほ当日氏は酒をのんで出廷したらしい。しかしながら、長年妻女の重病に苦しめられ事業に失敗し、今また数多の子を残して妻君を〔に〕逝かれた氏の心情もひしひしと察せられる。われわれは6名の子達を立派に育てたいものだ。氏も今にきつと元気に恢復して健闘することを信じてゐる」云々。なほ救世軍日本人部の収容児童50余人あり。そのうち赤子だけでも12人ゐる。目下その

大半はサマー・キャンピングにいてゐる<sup>16)</sup>。

次は1930年8月15日の『日米新聞』の記事である。児童数が83名に増えていたこと、その学齢別内訳、そして養育に要する経費が具体的に記されている。

救世軍小児ホームは現在の収容児童83名で年々増加の傾向をしめしてゐる。右のうち5名は天涯の孤児であるが、他は片親をうしなったもので、これ等の小児のために係りきりの嫁母が4人ゐる。年齢は生後8か月の赤ん坊より16歳の少年まで。小学校へ通学してゐる小供達は35人、ジュニヤ・ハイ及びハイスクールの生徒13名である。子どものホーム生活はなかなか規律的で、6つぐらゐから、身の廻り品を整へてチャンチャン寝起きするさうである。(中略)一人前の収容費は月13弗見当であるが、直接預かるのは15弗、コートを通じての托児は20弗で、右のうち10弗は政府、のこりの10弗は郡、不足費は救世軍本部より補足されることになってゐる<sup>17)</sup>。

1930年9月12日の『日米新聞』にも、両親を失ひ孤児となった子どもの数よりも母親を失つた子どもの方が多く収容されていることが記されている。渡米して20年余り、晩婚にして妻を迎えたものの病気で妻を失ひ、初老の男親ひとりでは乳飲み子を育てることができないとして救世軍に助けを求める事例が後を絶たなかつたようである。

異国に労働生活幾星霜を送る邦人の健康は、どこからともなく病魔の浸蝕する機会が多くつくりやすい。最近では丁度第一世の平均年齢45,6歳で、いはゆる働き盛りを少しすぎて初老の坂に登りかけたもつとも人生の危険な衰退期へ過度状態にあるとの顕著な例として最近桑港救世軍に親を失つた、小児を収容してくれと申しこむ数は過〔加〕速度に増し、申し込みに応じて収容すれば300名は短時日に集まるであらうといはれてゐる。目下、収容児童は75名、内全然孤児は10名たらずで、大体において半ば孤児、母親を失つた子供が多い。もつとも幼きは6か月で、ここにはハイスクール卒業までおくことになってゐる<sup>18)</sup>。

社会事業館の収入は、すべて救世軍日本人部の自給によってまかなわれていた。1930年に小林政助が山室軍平に語ったところによれば、子ども一人あたりに年間35ドルかかるが、それに対してサンフランシスコ郡とカリフォルニア州からの補助金はそれぞれ10ドル程度あつたにすぎなかつたという。民間の福祉事業を支援するための共同募金であるコミュニティチェストからは、総額7,000ドル余りの補助があつたが、毎年12,000ドルを要するとのことであつた<sup>19)</sup>。1932年度の救世軍日本人部の収支によれば、収入のほとんどはサンフランシスコ市コミュニティチェストからの補助金(約40%)と州および郡からの補助金(約35%)、それに日本人コミュニティからの寄付金(23%)であつた。支出では食費と人件費に出費がかさみ、収支は常に赤字か1パーセントあまりの繰越を得る程度にすぎなかつた<sup>20)</sup>。

このように救世軍日本人部の社会事業館は、日本人移民社会にとって欠かせない存在となつていたが、それが、突然、存続の危機に直面することになつたのである。

### 3. 1937年の社会事業館——その設立過程と設備

#### 3.1 社会事業館に対する改造命令と小林政助による日本での募金活動

その発端は、1932年7月、サンフランシスコ市衛生局より社会事業館は木造家屋であり、防火設備が不十分であるため、改造が必要であるとの命令が出されたことにあった。アメリカ救世軍西部軍国としては、改造費用を捻出する方途がないため、社会事業館を閉鎖するとし、その旨を当時日本に帰国中であった小林政助少佐に通報した。それに対して小林としては社会事業館を閉鎖することはできない、社会事業館を改造するにしたい、改造に要する経費については日本滞在中に集めるとした。その後、同年9月、市の衛生局より不燃性のものに改造するようにと命じてきたため、救世軍西部軍国では新築に要する費用を算出して75,000ドルと見積もり、それを小林に知らせた。それを受けた小林は日本国内での募金活動に全力を傾けると同時に、サンフランシスコ市当局に対して新築の社会事業館が完成するまで当分の間、旧館を使用できるようにと許可を願い出ることとした<sup>21)</sup>。

日本に滞在していた小林政助は、日米関係に精通している政財界人に次々と接触をはかり、募金活動を展開していった<sup>22)</sup>。その結果、1932年12月には森村(開作)市左衛門から5,000円、渋沢敬三からは2,000円の申し出を得、1933年1月に会合を開いた日米関係委員会は15,000円を集めて小林に交付するとした。その後も小林政助は宮内省の木下課長、関屋貞三郎宮内次官と懇談し、4月以降は外務大臣内田康哉、首相斎藤実、逓信大臣南弘と面会し、7月には北白川宮邸で講演をおこなった。こうした政財界・皇族、さらには軍部に対する働きかけが効を奏したのだろう、1933年10月3日には昭和天皇から「社会事業館新築ニ付思召ヲ以テ」金一封として下賜金5,000円を受けるにいたったのである。

そして1933年12月には河井弥八、関屋貞三郎、岡浪之助、一条秀美ら11名を会員とする「平洋会」が組織された。これは小林政助がアメリカに帰っても募金活動を後援するとした団体であった。こうした後援団体ができたことから、小林政助は下賜金を含めて日本国内で集めた支援金31,650円を抱いて日本を出発することとし、34年1月、サンフランシスコに到着した。その後平洋会から1万数千円の募金が送られてきた。天皇からの下賜金は企業から寄付金を集める際の呼び水となり、三井合名会社、三菱合資会社、住友吉左衛門からそれぞれ6,000円の寄付がよせられ、日本での募集総額は48,325円、約14,190ドル16セントとなっていた<sup>23)</sup>。

#### 3.2 アメリカでの募金運動と社会事業館新築期成協会の発足

アメリカに戻ってきた小林政助は、1934年3月、「在米日本人社会事業館新築趣意書」を発表し、在米同胞に向けて資金援助を訴えた。

(上略) 祖国有力者は今後も声援を与ふると共に、在米同胞の努力を期待いたして居りますから、今般帰任と共に米国に於ける同胞諸君の同情後援を仰ぎ、速やかにこの問題を解決し、同胞社会の安全を期し度いと熱願いたして居ります。(中略) 社会事業館の任務は極めて広汎にわたり決して一宗一派の宣伝機関の如きものでなく、同胞社会全体の機関であります。

新築の費用は約7万5000弗を要する見込みであります、能ふ限り完全を期せんと計画して居ります。(中略)素と弱きを扶くるの精神は日本民族意気の精華であります。殊に天涯の異郷に手を携えへて移住し、苦楽成敗を共にし、互に米国を我が郷土と定めんと、一致提携したる同胞の社会は、云はば一つの大家族のやうなものであります。即ち老幼相扶け、強弱相憐み、貧富相賑はして相共に苦楽をわかたねばなりませぬ。願くは同胞諸君がこの社会事業館新築に対し特別なる御後援を咨まれざらんことを。

昭和9年3月

救世軍在米日本人部

指揮官少佐 小林政助<sup>24)</sup>。

こうした救世軍の小林政助の訴えを支援するとして1934年4月に組織されたのが「在米日本人社会事業館新築期成協会」(以下、新築期成協会)であった。同協会による呼びかけ文と呼びかけ人は以下の通りである(ただし、職業や役職については坂口が付記した)。

今般救世軍在米日本人部に於て計画する在米日本人社会事業館新築を速かに竣成せしむる目的を以て本協会を組織し米国各地に於ける委員と連絡して広く同胞の協力を求め其の目的の貫徹を期して居ります、願くは同胞諸君がこの有意義なる、また焦眉の急を要する事業を後援せられんことを。

1934年4月

在米日本人社会事業館新築期成協会

- |     |       |                                 |
|-----|-------|---------------------------------|
| 委員長 | 塚本松之助 | (ピープルズ洗濯所、桑港日本人会会長)             |
| 委員  | 青木道嗣  | (大成堂店主、新世界日日新聞社長)               |
|     | 小池実太郎 | (日本ドライグーズ商会)                    |
|     | 島内良延  | (日米新聞編集局)                       |
|     | 海老名一雄 | (北米朝日新聞社長)                      |
|     | 坂田亀貴  | (農業、クラークスパークに農園)                |
|     | 畠山喜久治 | (農業、サラトガ日本人会会長)                 |
|     | 前田寛次郎 | (農業、ダイニューバに農園)                  |
|     | 石丸正吉  | (農業、ストックトン日本人会)                 |
|     | 佐藤力太郎 | (花園業、在米日本人会副会長)                 |
|     | 松田午三郎 | (保険業、ワッソビル在住)                   |
|     | 松本万亀  | (桜府日本銀行頭取)                      |
|     | 三浦常太郎 | (モントレイ日本人会評議員)                  |
|     | 矢幡富蔵  | (歯科医、オークランド日本人会) <sup>25)</sup> |

1921年の社会事業館設立に際して呼びかけ人となっていた人びとは、サンフランシスコ総領事や三井物産のサンフランシスコ支店長とその妻たちなど、当時の日本人社会の名士であった。それに対して1934年に社会事業館の新築に際して呼びかけ人となっていたのは、アメリカに渡っ



て苦節三〇年、農業や移民実業家として成功して定住し、北カリフォルニア各地の日本人会役員となっている人たちであった。こうした点にも日本人移民社会の成熟を見ることもできる。だが、総領事が呼びかけ人に加わらなかったのは、総領事の関知しえないところで皇室から下賜金を受領してきた小林の独走を快く思わない感情が総領事側にあったからであった。同様に三井、住友、横浜正金銀行など現地の有力日本企業の支店長も不況であること、すでに本店が寄付に応じていることなどを理由にして積極的に賛意をしめしていなかったのであった<sup>26)</sup>。

### 3.3 移転先住民から起こった社会事業館建設に対する排斥運動

1935年1月、救世軍日本人部は、現住地に社会事業館を新築するという当初の予定を変更し、新たな土地としてサンフランシスコ市郊外のヴィジテーション・ヴァレー (Visitacion Valley) 地区にあるマクラレン公園 (McLaren Park) 内に23エーカーの敷地を選定し、市の支援も受けて2万ドルで購入する契約を結び、7月上旬には土地の受渡しをおこなうこととした。その予算額の内訳と建物群のあらましについて、1935年4月18日の『日米新聞』は「救世軍社会事業館 建設準備工作成 予算78,645弗」と題し、次のように報じていた。

南桑港市に近い風光明媚の景勝地マクラレン・パーク指定地の中にあるベジテーション・バレーに建設される日本人救世軍社会事業館は既に建設に関する一切の準備工作を終り、愈々近く工事着工の段取りとなったが、昨朝小林救世軍少佐の発表せる同館建設の予算費は左の如きものである。

#### 社会事業館建設予算

一 金 10,000 ドル	土地
一 金 12,000 ドル	本館
一 金 12,900 ドル	小児ホーム 4 棟
一 金 4,000 ドル	養老院
一 金 3,225 ドル	病院舎
一 金 2,000 ドル	道路建設費
一 金 7,120 ドル	家具並什器
小計 61,245 ドル	以上 9 月までに完成を期す
一 金 3,500 ドル	病舎一棟
一 金 3,500 ドル	主任住宅
一 金 3,200 ドル	会館
一 金 5,000 ドル	体育館
一 金 2,200 ドル	建築技師謝礼
小計 金 17,400 ドル	以上 12 月下旬迄に完成期す

現在救世軍には聖上陛下よりの御下賜金 5,000 円、ロンドン本部より 10,000 弗、米国本部よりの 5,000 弗を始め、総計 55,000 弗あり。更に近く日本より約 1 万弗の入金があるので、最早建設費用も募金も彼岸が見えた訳である<sup>27)</sup>。

ところが1935年4月下旬、移転先住民から突如として社会事業館建設に対する排斥運動が始まった。この動きに対してサンフランシスコ市長のロッキーも調停に入ったが、排斥派は同地域を社会事業館の建設を不可とする「第一住宅区域」にするよう市の都市計画課に申請し、35,000人の署名をもって「すさまじい意気込み」で住宅区域への変更を求めてきた。選挙を控えていた市参事会は選挙民の世論を無視することはできないとして、積極的な調停には及び腰になっていた。この問題はサンフランシスコ市都市計画課特別委員会において協議が重ねられたが、住民との対立を避けたいとした救世軍日本人部は、1935年7月17日、移転計画を取り下げ、古い社会事業館を取り壊し、その跡地に新築することで解決策としたのであった<sup>28)</sup>。その背景を『日米新聞』は次のように伝えていた。

(前略) 要は救世軍としてもベジテーション平原住民の反対を押切り同方面へ建設する事は今後相当政治問題化する惧れもあり、旁市参事会員の意見も斟酌して最初の計画通り現敷地へ建設する事となったもので、偶々ベジテーション平原の如き好敷地が見出された為同方面への会館建築案が出たとはいへ、かやうに問題化した以上、むしろあっさり先方に花をもたせて、名より実を取るの賢明を選んだものだが、此の点救世軍本営の努力はもとより、建築委員会及び小林少佐の努力が多とされてゐる。

尚救世軍では一応市参事会(ママ)の正式承認を得た上直ちに現会館の取壊し工事に着手し、10月中旬頃華々しく起工式を行ふ予定である。尚ロンドン救世軍本営より更に5,000弗寄付する旨昨日入電があった<sup>29)</sup>。

この時点で、民家の密集するサンフランシスコ市内の日本人街を離れ、農園に囲まれた広い敷地に一大療養・養老施設を建設するという夢も潰えさってしまった。社会事業館の新築のためにとアメリカ各地に在留する日本人に拠金を呼びかけていた新築期成協会は、前記の委員に阿部豊治を加えて15名の名を掲げ、『新世界朝日新聞』と『日米新聞』に「在米日本人社会事業館敷地変更顛末書」を公表し、在米日本人の理解を求めたのであった。ここでは『新世界朝日新聞』1935年7月21日の記事からその末尾の一節を引用しておく。

前後数回協議を重ね、遂に現在の社会事業館を取り壊し、其跡に新築する事と決定いたしました。それにつき市当局の同情は高潮に達し、凡ゆる点において便宜と好意を表し、ヴェジテーション・バレーの土地は市において買受け、救世軍側が被った損害数千弗を弁償することを申出しました。また新築に関しても能ふ限り経済的に(無論合法的)取計らひ建築許可書を本日下附しました。

現在の社会事業館は近日解体し、直に新築に着手します。養老院は将来分院として郡部の広き田園に建設することになりました。

希くは同胞諸君が一層の御同情をもつて御援助を賜はり、この大切な社会事業の基礎建築を達成せしめられんこと偏に願ひ申し上げます。

昭和10年7月19日

在米日本人社会事業館新築期成協会<sup>30)</sup>

### 3.4 難航した資金集めと建築労働組合とのトラブル

サンフランシスコ市郊外の広大な敷地へ移転するという計画が雲散霧消したことから、新たな建物は古い社会事業館を取り壊し、その跡地に建設することとなった。1935年8月には既存建物の解体工事が始まることとなったが、当然のことながら、新館が完成するまで日本人本部の事務所や子どもたちの宿所を借り受け、分宿することが必要となった。

日本人救世軍では愈々近く解体工事を進めるので子供や老人達を分宿させる事になり、オファレル街1,343番から47番までの3軒続きフラットを借り入れたが、それでもまだ収容し切れないので、更に同街1,398番の家を借入れた。尤も現会館裏手にある養老院は取壊さぬので其儘存置する事になるが、小隊のヘッドコオターは更に適当な家を見つけて引越すべく大体に於てラグナ街1,501番の事務所と共に救世軍では8軒の家にそれぞれ分解されるものだといふ<sup>31)</sup>。

当初、起工式を1935年10月に予定していたが、その計画は4カ月余りずれ込み、1936年2月19日に挙行されることとなった<sup>32)</sup>。その日の様子を『新世界朝日新聞』は「曇天を裂く陽光の中に厳粛な起工式 社会事業館の新生命に・・・気高く響く君ヶ代」との見出しを立てて、次のように記していた。

過去数年間、或は心なきものの排日運動に、逆宣伝に、血と汗と涙の苦闘をつづけて来た救世軍の在米日本人社会事業館起工式は、小林少佐とともに日夜寝食を忘れて奔走して来た事業館建設中央執行の委員長塚本松之助氏の帰国出発の日を明日に控えた昨19日午前10時、数日來の重苦しい曇天を裂いて陽光斜にさす中、いとも厳粛に執り行はれた。式場にあてられた敷地は旧会館を取り壊したまま、未だ地ならしも出来てをらず、廢墟そのままの姿の中に旭日旗と星条旗がひるがへり、生まれ出づる新生命を祝福するが如く、ロッシー市長代理、富井総領事代理その他の出席名士を前にして起立せる小林少佐は、折から囀啼と響きわたる君が代の音に、過去数年間の苦闘と明日への希望に燃えた感激と感謝の涙をはらはらと流し、劇的シーンの中に式は進められた<sup>33)</sup>。

起工式が当初の予定より4カ月余りも遅れたのは、1936年になっても建設資金の調達が難航しており、25,000ドルの不足があったことによる。西部軍国本営は資金全額の調達がなされなにかぎり、工事着工の許可は下せないとしていた。しかし社会事業館の存廢は孤児や独身老人たちの死活問題である。事業館の早期完成を期する在米日本人社会事業館新築期成協会では、塚本松之助、石丸正吉、松田午三郎の三人が保証人となり、在米の花園業者安光留吉が所有する東京電燈株式会社の1,300株(額面65,000円、時価78,000円)を借入れ、これに松田がもつ横浜正金銀行サンフランシスコ支店の預金証書(9,137円2銭)を合わせた87,137円2銭を準備することができた。この金額を100円=29ドルで換算すると25,215ドル91センになるとして、西部軍国本営に供託したのである。こうして建築募金が定額に達しなかった場合はこの供託金より不足額を支払うこととする了解ができ、西部軍国本営より建築着工の許可がでたのであつ

た<sup>34)</sup>。

新築工事は1936年4月上旬に始まり、6月には基礎工事も完成した。すると今度は建築労働組合（ユニオン）から「横槍」が入ってきた。日本人の献金による社会事業館の工事であるから日本人大工の手で作業させようとして大工を呼び集めたとき、ユニオンから「組合員以外の大工の就働絶対に反対！」との声があがってきたのである。

ユニオンがクレームをつけたのは、日本人大工5名が初めて建築現場に入った直後の1936年6月1日のことで、日本人大工全員が現場から身を引くまで、他の白人労働者（全員組合員）には作業をさせないというものであった。同工事の請負業本部では、社会事業館は日本人の献金によるものであるから、日本人の手で大工工事だけはさせても宜しいではないか、また日本人の建築業者組合からは「我々をもユニオンに加盟せしめよ」と交渉を続けたが、ユニオンからの回答はその規約に「帰化不能外国人は絶対加盟せしめず」とあることから、いずれの交渉も拒むとするものだった<sup>35)</sup>。その後ユニオン側は日本人大工が工事現場に入り込まないようにと嚴重にピケを張り、工事を始めた<sup>36)</sup>。

1936年6月6日の『新世界朝日新聞』は、ユニオンとの「対立は排日化の恐れあり」との見出しを立て

（前略）桑港在住の大工は勿論、遠く各地から島本建築事務所の募集に応じて集まった大工諸君も、工事に一指も触れずして追ひ返され、更に救世軍でも一昨日島本氏を呼んで「日本人大工諸君の損害に関しては後程考へさしてくれ」と暗に契約破棄を宣した由で、今や全く日本人大工の就働は絶望視されるに至った<sup>37)</sup>。

と一連の結末を伝えていた。そして工事は遅れに遅れ、その完成は1937年2月までずれこむことになったのである。

### 3.5 1937年の社会事業館とその設備

当初の見積額75,000ドルを上回り、総工費92,000ドルを要した新しい事業館は、1937年2月25日に落成し、28日に献堂式ならびに開館式が催された。昭和天皇より5,000円の下賜金があったことから邦字新聞はこの建物を「恩賜記念日本人社会事業館」と呼んでいたが、献堂式当日に配布されたプログラムには単に「在米日本人社会事業館」、英文表記ではNew Japanese Social Center Buildingと記載されていた<sup>38)</sup>。式典は建物の前で行われたが、ゲリー街とラグナ街の角には3,000人の来会者があり、「公道は完全に通行止めの人海」と化したという<sup>39)</sup>。

写真1 1937年の社会事業館全景



〔出典〕外務省記録 I-5-0-0-3『在外本邦社会事業関係雑件』所収

新しい社会事業館の全景は、写真1に見る通りである。サンフランシスコ市のラグナ街1,450番地に立地し、正面は西向きでラグナ街、北側がゲリー街に面している。地下一階、地上三階の建物で、外壁はピンク色に塗られていたという。傾斜地に建てられることから正面に立つと地下室の窓枠が見える。地下の部屋には正面右側にある「大衆入口」から入ることができ、奥に進むと300人収容する礼拝堂と一般に図書を公開する「平洋会室」があったという<sup>40)</sup>。

最後に献堂式の前日に事業館を訪問した『新世界朝日新聞』記者による視察記を引くことにしよう。まずは少女たちの寝室の様相である。

更に足を転じて二階に案内されて行ったが、こゝもまた白塗りの壁に磨きたてられたフローアー、まづガールズ側の寝室から見せてもらった。女尊男卑といふわけではあるまいが、ガールズは南側の最も日当たりのいい方を頂戴してゐる。寝室が6つ大きい室にはシングル・ベッドが6つ、小さいには2つといった具合皆んなきちんとせいとんしてあって見るからに気持ちがいい。このガールズ側には職員室が更に2つあり婦人の監督様がちゃんと控へてゐて、起居はなかなか嚴重であると聞く。驚くことには男女別に社交室まで設備してあって、女側の社交室にはピアノまで据えつけてある。

便所は少々贅沢と思はれるほど立派で、バスタブが2つ、それにシャワー・バスがつき、洗面器、トイレットが5つ宛といった具合、床は全部純白なタイル張りである。高級なホテルでもなければこんな設備はないかもしれない<sup>41)</sup>。

写真2 児童用寝室



〔出典〕写真1に同じ。

写真3 児童用洗面所 浴室 便所



〔出典〕写真1に同じ。

そして建物の北側へまわった記者は少年たちの部屋をのぞき、3階に向かった。

ボーイスの寝室が合計8つ、ガールズのと大同小異である。がボーイス側の風呂場には日本風呂が1つ据えつけてあり、子供たちはこれを最も悦ぶといふ。ボーイス側にもガールズ側にも職員室が1つ宛あり、職員室には全部バス・ルームが設備してある。

3階に行って驚いたのは、男女の寝室とも2階と同様であるが、2階の教室の真上に当たると

ころに病院のあることだった。診察室が1つ、病室が2つ、それに病人の食事室、看護室が各1つ宛而も悉く病院と同じ設備が施してあるのだ。3階の日当りのいい小林少佐の室に行って奥さんのお茶の御饗応をうけながら直接小林少佐にうかがったのであるが、この社会事業館の経営費が年に2万ドル、1日約60弗、「斯る大所帯で1日60弗は案外安い方ですが、社会事業の経営は一通りの苦勞ではありませんよ」と暗に苦闘の種をほのめかした<sup>42)</sup>。

写真4 病室



〔出典〕写真1に同じ。

このように1937年に建てられた新しい社会事業館には、1階に2つの事務室と70人収容する食堂と台所が、地下には300人収容する礼拝堂と一般に図書を公開する平洋会室それに食料庫と青年たちの手工芸実習室、遊技室が備えられた。2階には少年少女の寢室に教室2つ、それに裁縫室1室が設けられた。3階には寢室のほかに病院診察室1室と病室2つ、そして病人食事室と看護室がそれぞれ1室ずつ設置されていた。設計は全て古庄弘大尉の手によるものであった<sup>43)</sup>。

社会事業館は全く一つの社会を構成してゐるのだ。足を一步踏み出せば学校あり、テラーあり、風呂屋あり、ランドリーあり、階下に行けばレストランあり、遊技場あり、而もその悉くが一切無料と来てゐるのだから正にユートピアである。これを一つの村に譬へえれば、小林少佐はよき村長さんだ。しかし社会事業館は村に譬へるべくあまりに完全してゐて、超近代味がある。それは正に科学が誇る近代都市の観さへある<sup>44)</sup>。

かくして館内を視察した『新世界朝日新聞』の記者は1937年に建立された社会事業館を「ユートピア」ととらえ、その完全さから「科学が誇る近代都市の観さへある」と絶賛した。ここに新たな社会事業館は保護収容実績を増大させ、日本人移民社会の期待に応えるものとして姿を現したのであった。

#### 4. むすび

アメリカに日本人救世軍を創設した小林政助は、1940年10月10日、狭心症で死去した<sup>45)</sup>。57歳であった。1941年4月、日本人部は改組となり、各小隊はアメリカ救世軍の行政に従って三つに分割されることとなった。人事にも大きな異動があった<sup>46)</sup>。そのため在米日本人社会には、小林政助が死去して以来、サンフランシスコの社会事業館もアメリカ救世軍の本営に接収されるのではないかという懸念が生じていた。こうした在米日本人の間に広がっていた「深憂」を

払しょくする必要が生じたのだろう、本営としては社会事業館の建設当初から経営と管理を日本人に委ねることに方針を決定していたと公表することとなった。この公表を受けて1941年4月20日付けの『新世界朝日新聞』は、「救世軍の悶着解決 桑港中隊長には阿部中校 社会事業館も邦人が管理」との見出しを立て、以下のように報じていた。

〔アメリカ救世軍の本営では一坂口〕社会事業館は建設の当初から「日本人社会が沿岸に存続する限り且つ社会事業の必要ある限り、在米日本人社会事業館は日本人のためにのみ使用し、白人の使用または管理を許さず」との趣旨に従って飽くまでその経営および管理を日本人に委ねることに方針を決定してをり、救世軍と、もに社会事業館も、日本人が米土にある限り同胞の管理下に置かれることになった<sup>47)</sup>。

この発表から7か月余り後の1941年12月、日米戦争が勃発した。そして翌年2月には大統領行政命令9,066号が発令され、アメリカ市民権の有無にかかわらず西海岸に在住する日本人、日系人の全てを強制収容する措置がとられることとなった。アメリカ西海岸に住む日本人、日系人は一週間ほどの猶予期間を与えられた後、仮収容所に移され、次いで強制収容所へ移されることとなった。総立ち退きである。

サンフランシスコの社会事業館を終の棲家としていた年老いた日本人移民の一世はもとより、孤児ではあったがアメリカの市民権を持つ少女たちも立ち退きを強いられることになった。社会事業館で生活していたこうした老人や子どもたち、それに病気で入院していた人たちは、その後どこの収容所へ入れられたのだろうか。社会事業館を管理・経営する日本人がいなくなった時点で、社会事業館の建物は誰が管理していたのか。また、強制収容が解除され、サンフランシスコへ帰還した際に、日本人は再び社会事業館の管理・経営の権利を手にすることができたのだろうか――。

こうした戦中・戦後の社会事業館に実態については、調べがついておらず、未だ不明である。明らかなことは、現在もラグナ街1,450番の土地に1937年に建てられた建物が、外壁は塗り替えられているが、当時のままの姿を残して立っていることである。ただしその正面には「中華人民共和国」の表札が貼られており、屋上には同国の国旗が掲げられている。どのような変遷を経て現在の「在サンフランシスコ中華人民共和国総領事館」となったのか。明らかにすべき課題は多い。

## 注

- 1) 一例としてパラポ湊石ローレン麗子「ハワイにおける『プランテーション住居型』寺院建築の研究：ハワイの日系人社会における寺院建築の受容過程に関する研究(1)」『日本建築学会計画系論文集』(513号、1998年)をあげておく。
- 2) この点については坂口満宏「1920年代後半のシアトル日本人社会」『社会科学』55号、67-103を参照。
- 3) 日本人慈善会による日本人慈善病院ならびに日本人養老院の設立過程を跡づけたものに、山中速人『エスニシティと社会機関 ハワイ日系人医療の形成と展開』(有斐閣、1998年)、104-114頁がある。
- 4) シアトル小児園については前掲坂口満宏「1920年代後半のシアトル日本人社会」、ロサンゼルスに設立された南加小児園については大森万理子「『アメリカ化』から『日系人の子供は日系人の家に』一羅

府日本人人道会から南加小児園への展開（1912～1952年）を中心に一」（土屋敦，野々村淑子編『孤児と救済のエボックー16～20世紀にみる子ども・家族規範の多層性』（勁草書房，2019年所収）が詳しい。

- 5) 坂口満宏「日本人移民と社会事業ーアメリカ救世軍日本人部の活動を中心にー」（『渋沢研究』第6号，1993年）を参照されたい。
- 6) 『日米新聞』1919年8月16日。ただし，適宜，句読点を付した。また，本稿では横書き表記とするため，漢数字を用いて記載されていた年月日や人数，金額についてはアラビア数字で表記することとした。以下同じ。
- 7) 「太平洋沿岸開戦記（二）」（『ときのこゑ』第573号，1919年11月1日）。
- 8) 「米国に於ける同胞の間に活躍せる救世軍」（『ときのこゑ』第601号，1921年1月1日）。
- 9) 山室軍平記念資料館所蔵『切抜帖アルバム（在米日本人部）』所収年月日未詳アメリカ救世軍日本人部発行『ときのこゑ』。〔 〕の語句は坂口が付記したもの。以下同じ。
- 10) 同上『切抜帖アルバム（在米日本人部）』。
- 11) 山室武甫『在米同胞の先覚 小林政助伝（救世軍在米日本人部の活動）』（「山室軍平選集」刊行会版，教文館，1963年，以下『小林政助伝』と略す）129 - 131頁。
- 12) 山室軍平手記『記憶の助け』第14巻，1926年（同志社大学人文科学研究所所蔵「山室軍平資料」マイクロフィルム）。
- 13) 『日米新聞』1928年6月10日。
- 14) 『日米新聞』1929年7月25日。
- 15) 外務省記録I-5-0-0-3『在外本邦人社会事業関係雑件』。
- 16) 『日米新聞』1930年6月27日。なお，史料中の「王府」とはオークランドのこと，「亜郡」とはオークランドのあるアラメダ郡のことである。
- 17) 『日米新聞』1930年8月15日。
- 18) 『日米新聞』1930年9月12日。
- 19) 山室軍平『渡米雑記』（同志社大学人文科学研究所所蔵「山室軍平」マイクロフィルム・リール7）。
- 20) 1933年7月3日サンフランシスコ総領事若杉要発外務大臣内田康哉宛第150号「桑港救世軍日本人部ニ関スル件」（外務省記録I-5-0-0-3『在外本邦人社会事業関係雑件』所収）。
- 21) 「救世軍日本人部経営社会事業館新築問題経緯」（外務省記録I-5-0-0-3『在外本邦人社会事業関係雑件』所収）。
- 22) 小林政助の日本滞在中における募金活動については，前掲山室武甫『小林政助伝』192-210頁に詳しく記されている。
- 23) 前掲「救世軍日本人部経営社会事業館新築問題経緯」。
- 24) アメリカ救世軍日本人部『ときのこゑ』第100号，1934年6月2日。
- 25) アメリカ救世軍日本人部『ときのこゑ』第100号，1934年6月2日。
- 26) サンフランシスコ総領事富井周発外務大臣広田弘毅宛「機密第三七七号」（1935年12月16日，外務省記録I-5-0-0-3『在外本邦人社会事業関係雑件』所収）。この点の詳細については拙稿「日本人移民と社会事業」を参照されたい。
- 27) 『日米新聞』1935年4月18日。
- 28) 『日米新聞』1935年7月18日。
- 29) 『日米新聞』1935年7月18日。
- 30) この敷地問題のあらましについては，在米日本人社会事業館新築期成協会（委員長塚本松之助）による「在米日本人社会事業館敷地変更願末書」に詳しい（『新世界朝日新聞』1935年7月21日ならびに『日米新聞』1935年7月21日 - 7月23日）。
- 31) 『日米新聞』1935年8月5日。



日本人移民の「ユートピア」(坂口)

なお、前掲『小林政助伝』225頁に従い、分宿先の住所を整理すれば下記の通りとなる。

本部	ラグナ街 (Laguna St.) 1501 番
児童収容所	オツファレル街 (O'Farrell St.) 1343,1345,1347,1398 番の 4 軒
養老院	ゲリー街 (Geary Blvd.) 1418 番
食堂	ラグナ街 1415 番, 三原氏階下

- 32) 『日米新聞』1936年2月20日。
- 33) 『新世界朝日新聞』1936年2月20日。
- 34) サンフランシスコ総領事富井周発外務大臣有田八郎宛「機密第一五四号」(1936年5月25日, 外務省記録 I5-0-0-3 『在外本邦社会事業関係雑件』所収)。
- 35) 『新世界朝日新聞』1936年6月3日。
- 36) 『新世界朝日新聞』1936年6月5日。
- 37) 『新世界朝日新聞』1936年6月6日。
- 38) 外務省記録 I5-0-0-3 『在外本邦社会事業関係雑件』。
- 39) 『日米新聞』1937年3月2日。
- 40) 「社会事業館の奥の奥まで〔一〕」『新世界朝日新聞』1937年2月27日。
- 41) 「社会事業館の奥の奥まで〔二〕」『新世界朝日新聞』1937年2月28日。
- 42) 同上。
- 43) 『新世界朝日新聞』1937年3月2日。
- 44) 「社会事業館の奥の奥まで〔三〕」『新世界朝日新聞』1937年3月1日。
- 45) 『新世界朝日新聞』1940年10月14日。
- 46) 前掲『小林政助伝』265-266頁。
- 47) 『新世界朝日新聞』1941年4月20日。

